

# 和洋ラウンドシステムについて

## 英語の授業が変わります

### ● 和洋ラウンドシステム

ネイティブの子供が英語を習得するように、リスニング、スピーキングから英語を学び始め、最終的に4技能（リスニング、スピーキング、リーディング、ライティング）をバランス良く習得させるシステム。教科書を何度も繰り返し学ぶので、ラウンドシステムという（4～5回）。

### ● 授業の進め方

ラウンド1では、教科書を開かず、リスニングとスピーキングのみで、最初のユニットから最後のユニット11まで終わらせる（CDを聞いたり、ピクチャーカードを使い教員と生徒が英語で話したりすることで内容をつかんでいく）。最後のラウンド5では、最終的に自分の言葉で教科書の内容を説明できるようにする。つまり、生徒たちは英語を話せるようになる。

### ● ラウンドシステムの実績

本校のラウンドシステムのモデルとなっている横浜市立南高等学校附属中学校では、ラウンドシステムを導入した第1期生では、英検のための対策を一切せずに、中学3年で準2級に85%の生徒が合格している。実際に、英語を話せるようになるだけでなく、英検、模試などの試験でも成果を上げている。

### ● 和洋ラウンドシステムの特徴（横浜南との違い）

学んだ英語を実際に使う場が多くあるのが、本校のラウンドシステムの最大の特徴であり売り。ネイティブの教員が行う英語の授業は、クラスを3分割し10人程度の少人数で行う。ここで、プレゼンテーションの練習など、実際に英語で表現する活動も多く行うことで、さらに実践的な英語力をつけることができる。自ら考え、それを英語で表現する練習を積むことは、2020年以降の入試でも役に立つと考える。校内には、フルタイムのネイティブの教員がいるので、英語を話したいときに、使うことができる環境も整っている。

### ● どんな生徒に入学してほしいか。なぜ英語の試験を導入するのか。

ラウンドシステムは、どんな生徒でも確実に英語の力を伸ばすことができる。よって、英語が好きな生徒、英語を学ぶことに意欲のある生徒にぜひ入学して欲しい。英語の試験を導入するのは、英語を学ぶ意欲のある生徒に入学して欲しいからである。現在、英語を学んでいる生徒は、本校でさらにその英語力を伸ばし活躍してほしい。また、本校では、高校も含め、英語が好きな生徒が活躍できる場が多くある。英語を生かし、将来グローバルリーダーとして社会で活躍できる人材の育成に努めたいと考える。

## 英語教科書、繰り返し5回 学力向上、横浜の中学で成果

毎日新聞2016年4月4日 東京朝刊

文部科学省が2月に公表した2015年度の中高生の英語力調査の結果は、読む▽聞く▽書く▽話す--の4技能で国が掲げる目標にほど遠く、教育界に落胆が広がった。だが、その4技能の育成でめざましい成果を上げている公立中学校がある。横浜市立南高校附属中だ。その要因は、従来の概念を覆す授業方法にあった。「5ラウンド式」と呼ばれるその意外な方法とは--。

文科省の英語力調査の結果、中学3年生の4技能は5〜8割が国の目標「英検3級程度」に届かない「最下層レベル」だった。

ところが、14年度の横浜市立南高校附属中3年生（現在の高校2年生）は、159人中107人が準2級を、29人が2級を取得した。準2級以上取得者は3年生の実に86%にもなる。

中高一貫校の南高校附属中の英語授業は12年度の開校時から独特だ。教科書の第1章から順番に教えていき、1年間かけて最後の章までたどりつくのが通常だが、附属中は教科書を1年間で「5周」する。つまり教科書の内容を1年間で5回繰り返して学習するのだ。この方法を考案した英語担当の西村秀之教諭（42）にその具体的な内容を解説してもらおうと--。

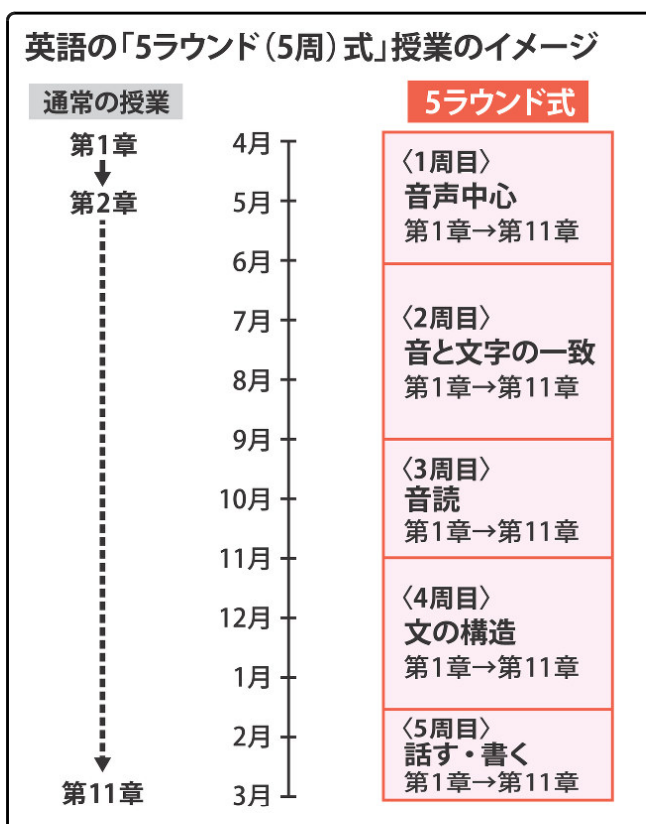
### ●聞き、読み、要約

まず「1周目（ラウンド1）」は「聞く」に重点を置く。CDを使って教科書の本文を繰り返し音声で聞かせる。あえて読み書きはせず、英語に耳を慣れさせる。その上で本文の内容を描いた複数のイラストカードを準備し、生徒にストーリー順に並び替える作業をさせる。それを4〜6月の3カ月間で、第1章から最終章まで一気に進めてしまう。

「2周目」は、教科書の本文を一文ごとに順不同に並び替えたシートを生徒に配り、CDを聞きながら順番通りに並び替えさせる。シャワーのように浴びせた音と、単語や文章を一致させるのが狙いだ。

「3周目」は「読む」が主眼で、音読が中心だ。「4周目」は、教科書の本文中の動詞や形容詞など複数の箇所を空白にしたワークシートを配布し、その穴を埋めながら音読させる。英文の構造を意識するようになるという。

最後の「5周目」は「話す」を重視する。2人1組で、本文の要旨をパートナーに英語で説明することを繰り返す。そして最後に本文の要旨をまとめて英語で書く--というのが主な流れだ。



西村教諭によると、当初は、保護者にも「最初に読み書きを教えなくて大丈夫なのか」といった不安や戸惑いがあった。しかし、中学3年間を見据えた指導計画であることを丁寧に説明し理解してもらったという。「もちろんこちらにも失敗はできないというプレッシャーはありました」

そして「想像以上」の結果が出た。

## ● 「使える」を重視

3学期も終盤の2月末、1年生のあるクラスの英語の授業を取材した。第10章の「5周日」の授業だった。第10章のテーマは「お正月」。留学生を含めた仲間4人で初詣に行くという内容だ。

西村教諭の指示で、机が隣同士の生徒がペアを組み、互いに内容を1分ずつ説明し合う。「5周日」とあって、どの生徒も頭に内容が入っているせいか口調もなめらか。それが終わると、西村教諭は、各自が説明した内容を3分間でまとめて書くよう指示を出した。ここでもペンをすらすらと走らせる生徒が目立った。

西村教諭が指導の際に心がけている一つが「即興性」だ。教科書で学んだ内容をいつでも「使える」ようにするために必要な要素だという。

取材した日は月曜日だった。授業の冒頭、西村教諭は英語で「週末に何をしたの?」と話を向けた。すると次々と手が挙がり、「髪の毛を切った」「ディズニーランドに行った」などと生徒たちは口々に英語で返答した。

授業中は英語で話すことが基本だ。入学当初は「わかんねー」とぼやく生徒もいるが、中学2年の後半ごろには「不思議とこちらがしゃべっている内容を理解できるようになってくる」という。

「中高一貫で中学入試がある付属中だからでは」と質問すると、西村教諭ははっきり答えた。「このスタイルはどの学校でも通用すると思う」。横浜市は今後、この「5ラウンド式」を市内の中学に広げる方針という。【三木陽介】

## 中3「聞く」最下層レベル8割

文科省の15年度の英語力調査の結果、高校3年生（約9万人を抽出）の4技能別の成績は「英検準2級程度」に達している割合が「読む」=30%▽「聞く」=24%▽「書く」=17%▽「話す」=10%。「英検準2級程度」は、13年に閣議決定された「教育振興基本計画」で、高校卒業時の目標に掲げられたレベル。その達成には大きく届かなかった。

中学3年生（約6万人を抽出）の結果も、国が同様に目標とする「英検3級程度」に届かない「最下層レベル」の割合が「読む」=74%▽「聞く」=80%▽「書く」=57%▽「話す」=67%--だった。



西村秀之教諭(左から二人目)が見守る中、互いに教科書の内容を英語で説明し合う生徒たち